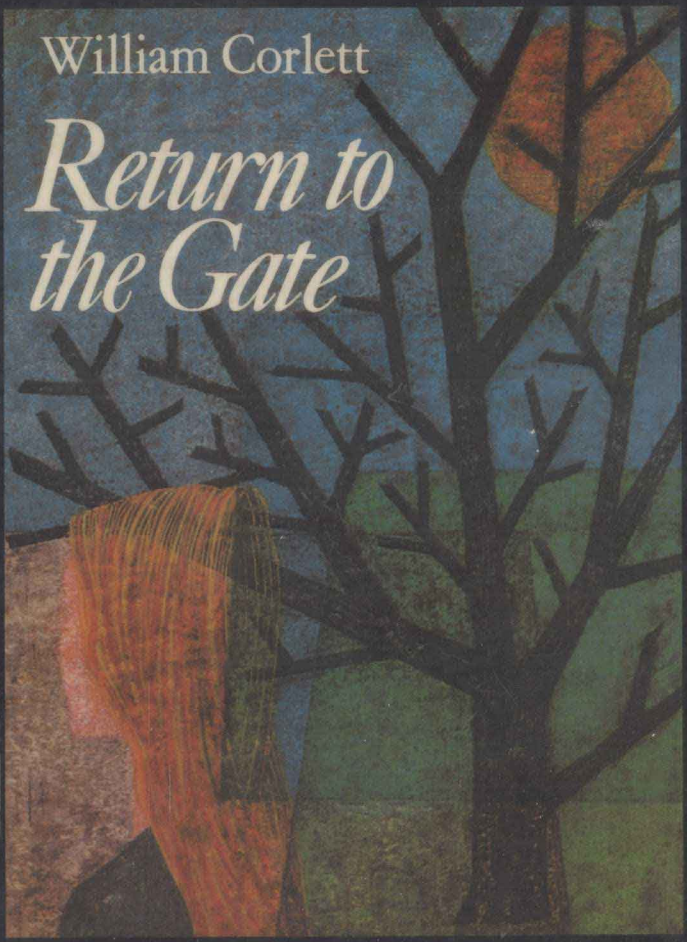
エデンに帰る

ウィリアム・コーレット作　越智道雄訳



岩波書店

933 エデンに帰る

ウィリアム・コーレット作

越智道雄訳

岩波書店 1980

276 p. 19 cm

(あたらしい文学 4)

エデンに帰る　あたらしい文学 4

1980年7月9日 第1刷発行 ©

¥1000

訳者 越智道雄

発行者 緑川亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 電話03-265-4111 振替東京6-26240 株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

印刷：三陽社 製本：文勇堂製本

エデンに帰る

ウィリアム・コーレット作　越智道雄訳　岩波書店

RETURN TO THE GATE
by William Corlett

Copyright © 1975 William Corlett
All rights reserved

This book is published in Japan by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo, by arrangement with Hamish Hamilton Children's Books Ltd., London, through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo.

目次

第一部　その家……9
第二部　その少女……83
第三部　家庭生活の情景……127
第四部　その少年……187
第五部　その村……251
訳者あとがき……273

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

エデンに帰る

夢の終り・・・・

けさ、わたしは自分が死にかけていることを覚った。

わたしは、大きなリンゴの木の下に立っていた……

いますぐではない――たったいまという意味ではないのだ――いつか近いうちにということだ。

これまでは自分が死ぬことを考えたことはなかった――これほど冷静に、またこれほど深くは。自分は不死身ではないのだ、とわたしは思った。他のどのような生き物とも変わらず、自分のからだも朽ちていく。自分ではどれほど長い寿命を与えられていると思っていても、それは大した長さではない。春の花が咲きほこる度に、秋ものみな盛りを過ぎて衰えていく度に、四季が仮借なく過ぎゆく度に、自分のからだも朽ちていくのだ。

生きる時と死する時。

わたしは大きなリンゴの木の下に立っていた――咲きいでたばかりの花々を通して、暖かい日差しが届いてくるし、ツグミが一羽、虫をつついていて、校庭では子供たちが黄色い声をあげて遊びほうけており、小川の上には小さなブヨが雲をなしてとび交っていた。

「夢の終りこそ、人生の始まりだ」と、わたしは思った。

わたしは死のうとしている、だからその前に、覚っておきたいのだ。

第一部　その家

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

1

なんとも奇妙なことに、いざ自分の過去のすべてを書きつけようとする段階になると、どう書き始めればいいのか見当もつかない。

どのような文体で書きつづるべきなのか？

いかにすれば、もっともうまく語ることができるか？

そもそも一切がどのようにして始まったのか？

こういう疑問にあまりに長くかかずらわって、なかなか筆がおろせなかったものだから、ついには時間がむだに過ぎていき、ぜんぜんあとがないということになりそうな気がしてきた。そんなわけで、わたしとしてはあやふやなまま決断を下して、ペンをとりあげたしだいだが、おそらく将来いつか――いつも将来があるものと思いこんでいるわけだ――だれか他の人間が、以下に書きつづる文章の中に、わたしたちの悪戦苦闘の物語を読みとってくれることを期待してのことである。

わたしが語りかけているのは、わたしの知らない、黄金の未来に生きている未知のきみに対してなの

だ。きっときみは、わたしたちに対して厳しい判定を下しはすまい、そしてわたしたちがたとえ賢明な行動はとらなかったとしても、せめてやさしい心でみずからの終りを迎えたいきさつを、読みとってくれることと信じる。

*

というしだいで、まず遠い過去の三つの情景から筆を起こすことにしよう。

*

一九七四年五月二十二日、第二十四番線バスでひとつの事件が起こった。わたしはいつものとおり、ハムステッド〔大ロンドン中部の区〕のサウス・エンド・グリーン〔ハムステッド・ヒース駅近く〕にある終点で八時二十五分にそのバスに乗った。いまにも雨のきそうな、陰気で暗い朝だった。朝はたいていそうなのだが、チョーク・ファーム〔ハムステッドから南下する大通りが、スン卜・バンクラスへはいるあたりをこう呼ぶ〕へ着くころには、バスは満員になっていた。キャムデン・タウン〔大ロンドン中部の区〕で二、三人降りると、車掌は降りた人数分だけの乗車を認めた。だがベイアム街への角を曲がったとき、若い女が一人とび乗ってきて、わたしのすわっている二階へあがってきた。すぐあとから車掌が追いかけてきて、満員だからつぎの停留所で下車してくれといった。つぎのバス停で数人が席を立って

下車したので、若い女はそこのバス停で待っていた客が乗りこんでこないうちに、あいた席のひとつへすべりこんだ。車掌がまた階段を昇ってきて、女に下車してくれといった。かの女が拒み、いさかいが始まった。

その間バスはとまったままで、わたしたち乗客は待たされるはめになった。

しばらくのあいだはわたしたちも辛抱して、二人の主役の激したやりとりを面白がってさえいたのだが、それも長くは続かなかった。とつぜん、前部の席にいる女が甲高い声をはりあげたのだ。「このろくでもないバスを動かしとくれ、他の客のことも考えてよ」するとよく乾いた材木に火の粉が散ったように、客たちの癇癪玉が炸裂した。女たちがわめきたて、男たちは足を踏み鳴らし、ゆっくりと手拍子を打つ。そうこうするうちに、階下の客がベルを鳴らしたので、車掌はかんかんになってかけ降りて行く。

二人の若者がつかみ合いを始めると、レーンコートを着た女がコーモリ傘をふりまわして、階段の下へ追っ払う。

運転手が現われて、片方の青年の襟首をひっつかむ。

外の舗道では、別のこぜり合いが起こり、治まりかけてはまたぶり返す。

車掌は、残っていた乗客全員――その中にこのわたしもはいっていたのだが――に下車を命じた。車

掌はまっさおな顔になって、からだがふるえていたけれど、自分こそ正しいと信じこんだ者に特有の威厳は、まだそこなわれてはいない。「こっちには乗車を拒否する権限がある……」かれは叫び続けた。

「拒否する権限が」

ところで、この騒ぎの張本人はどこにいるのだろう？　いない――影も形もなくなっていたのだ。きっと目的地の途中まで行く別のバスに乗りかえたのだろう。

舗道では、降ろされた客たちが車掌に悪態をつき、いまにも大騒動がもちあがりそうな雲行きだった。いく人かの女が早くも逆上して、拳でバスのボデーをたたき始め、やがて男たちも加わってバスをゆすり出したので、車はいつなんどきひっくり返るか分からないありさまだった。

ほんの数名の、もっと冷静な客たちは、その場からのろのろと去っていった。あまりにもあばれ方が激しいので、かれらの好みに合わなかったのだ。

わたしはというと、ながめている以外なすすべもないおのれの非力さを痛感しながら、地面に根がはえたように、その場につっ立っていた。

ついにありとあらゆる礼節の痕跡が跡形もなく消え去るかと見えた土壇場になって、別の二十四番線バスが姿を現わした。それはほとんどからっぽだった。腹立ちまぎれの捨てぜりふを投げつけて、客たちは新しいバスへ乗りこみ、あっというまにわたしだけがとり残されて、ひと気のない街路で車掌と向

かい合っていた。

「こっちが悪いんじゃない」かれは手まきタバコを作りながら、首をふって口の中でつぶやいた。「こちとらにゃかかわりのないこった」

その日の夜、日記帳に車掌のせりふを書きとめてから、わたしはこう書き足した。「このふたつのせりふは、われわれの文明の記念碑となるだろう。だがわたしは、どんな形にもせよ、批判的な気持でこういっているのではない。わたしの見るかぎり、車掌が悪かったわけではないのだ——またかれにはこれっぽっちもかかわりのないことだった。事件はただ発生したのだ。その点にこそ、わたしは恐ろしさを覚えずにはいられない」

*

第二の場面もまた、第二十四番線バスの二階で起こった。いや、そのバスの二階からわたしが観察したというべきか。

一九七四年七月のことで、わたしは勤めから帰る途中だった。

モールデン・ロード〔ロンドン中央部のケンティッシュ・タウンにある道路〕へくると、バスは信号でとまった。わたしはなぜとまったのかと夕刊から目をあげて、街路を見おろした。通りを一団の若者たちが歩いてくるのが目にはいった。

かれらはステッキを持っていて、それを虚空でふりまわしている。老女が一人、つめこみすぎた買物袋をひきずって、若者たちのほうへ歩いてくる。かの女がかれらとすれ違いかけたとき、若者たちはいっせいに老女をとり囲み、叫び声をあげ、からかいの声を発しながら、ステッキでかの女をおどしにかかった。

停車時間はごくわずかだったが、印象があまりにも鮮烈だったため、あれからなん十年をへたいまになっても、ついきのうのことのように目に浮かんでくる。デニムのズボン――いわゆるジーンズと呼んでいるやつだが――をはいた暴漢ども(まさにそうとしか呼びようのない手合いだった)が、口にタバコをくわえ、泥だらけの顔で、老女をおどし、からかっているのだ。老女は一度も顔をあげなかった。そのまま歩き続けたが、その様子たるや宇宙時代の民間防衛隊員にたたきこまれた、決まりきった注意事項に従っているだけという感じだった。つまり「ヒトという種族が野蛮時代に先祖返りした場合、あなたはいかに振舞えばよいか」というわけである。

暴漢の中で最年長の者でも十四歳は出ていず、最年少の者たるや八歳にしかみえないという点を除けば、これはさして目をそばだてるほどの光景ではなかった。

この場合もまた、わたしは自分がその日の夜、日記に記した感想を読み返してみたい。

「連中が十五歳前からこんなことをしでかせるのなら、廿歳になったらいったいどんな人間になると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.